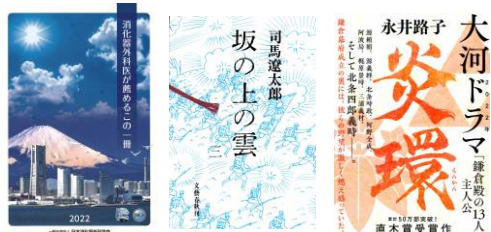


甲状腺外科草子 40

甲状腺外科医が薦める他所行きの本
杉野 圭三

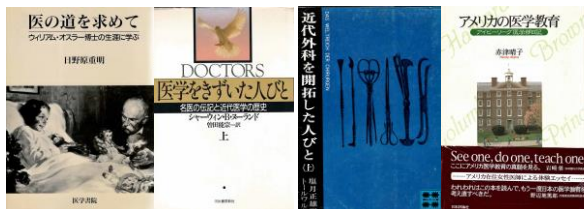
2022年の第77回日本消化器外科学会総会（横浜）では記念小冊子として、「消化器外科医が薦めるこの一冊」が発行された。65人の消化器外科医が、世阿弥、山極勝三郎、稲盛和夫、Kazuo Ishiguro、西岡常一（宮大工）などによる本を推挙し、大変興味深く拝見した。

「坂の上の雲」を挙げる人が最も多く4人、純粋な小説（定義困難）は少なく2-3人であったのが残念である。



この中で、永野浩昭教授（山口大学）の挙げた「炎環」は鎌倉幕府の内幕を描いた小説であり、早速本屋に直行し手に入れた。現在大河ドラマで放映中の「鎌倉殿の13人」の内容とも重なる部分が多く、興味深く拝読した。

甲状腺外科草子15では「名作と好きな本の狭間で」というタイトルで「好きな本」を述べたが、全国の外科医の前で「薦める本」1冊を挙げるのは極めて困難で逡巡する。どうしても人前で恰好を付けたがるのが人情で冒険小説、SF、時代小説を挙げるのを躊躇ってしまう。



医学系の書籍であれば、上に挙げた様なものを選択しがちであるが、これでは全く面白みが無い。医学を志す人間であれば、職業上必ず目を通すような種類のものであり、別の領域の本を推薦したいものである。



古典物であれば、最近イリアス、オデュッセイア、ガリア戦記が新訳となった。以前の岩波文庫版は正直なところ、読みにくく冗長であったが、新訳では格段に読みやすくなり、まるで別物である。

騙されたと思って、もう一度読み直す価値があり、ホメロスやカエサルの才能に驚かされること間違いなし。



江藤淳の「海は甦える」は山本権兵衛を主人公とした歴史小説であるが、数々のエピソードは小説以上に面白く描かれ、傑作である。1977年に仲代達矢、吉永小百合、加藤剛らの豪華俳優陣でドラマ化されたが、DVD化されておらず残念至極！

国務長官を務めたコリン・パウエルの「マイ・アメリカン・ジャーニー」は、ジャマイカ系移民の子供としてハーレムで育ち、軍人の最高位である統合参謀本部議長まで昇りつめた半生を綴っている。自伝ながら小説以上に面白い本である。

好きな本を挙げるのは簡単だが、全国の外科医の前では変なプライドが邪魔して、恰好を付けたくなり、他所行きの本を選びがちになることが問題だ！

やはり、どう考えても一冊に絞り込むのは無理でしょう！！

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2022年8月17日